榮ガ點茶三要曰、凡點茶先須煥盞令熱、則茶面聚乳、冷則茶色不浮ト也、

〔宗長手記上〕神の代よりもすぎのずんぎりと有、是は茶の寸切にて、今俗に青切といふがごとし、青切は、筒茶椀の口に青き筋ある所をいふ也、

〔親俊日記〕天文七年三月十一日乙酉、野州井修理茶之湯アリ、朝食、三百五十貫茶碗見之了、

〔總見記十六〕北畠入道逆心幷安土城御普請事

二月〇天正四年廿三日、安土山ニ到テ御坐ヲ移サル、當城普請ノ次第御意ニカナヒ、御褒美トシテ周光茶碗惟住長秀是ヲ拜領ス、誠ニ以テ忝キ次第ナリ、

〔大海のはし〕明暦のみかど、後西院茶の湯の數寄せさせ給ひけるに、井戸といふ茶碗をえさせ給ひて、二なくひめさせ給ふ、ある時は、うへの人びとに御茶をたまはせけるに、勸修寺の入道大納言經廣、法名紹光、貞享五年薨、參られける時、此井戸にて御茶給ひけるに、入道井戸の茶碗と申すものこそ名には承りていまだ見ず候へ、給はりて巨々見侍らばやと奏せられければ給はりけり、入道茶わんを持ちて、かうらんにのぞきつゝ見給ふほどに、とり落して御前栽のよしある岩のかどにあたりてくだけにけり、帝いみじうをしませ給ふ御氣色なればうちかしこまりて、まことはあやまちてとり落し候ひつれど、よくこそつかふまつりて候へ、井戸の茶碗は古きものにて、其かみいくらの人の手にふれけんも知らねば、けがらはしきえせ物にてぞ侍る、おほやけの御調度となさせ給ふべきものにも候はねば、くだけうせぬるこそ、まことにめでたく候へとて、まかり出でられけり、帝も然ることゝや思しめしけん、御氣色なほらせ給ひけり、

〔樂茶碗師統譜〕元祖　長次郎　又作朝　古利休使朝鮮人之雄于陶道者制茶器、長次郎傳其法、故取朝鮮之朝字、號朝次郎、寛永二乙丑歳九月終、

二代　吉左衞門　薙髪宗昧ト云、寛永十二乙亥歳五月終、